

## 「抵抗と解放の身体—— ブラジル伝統芸能『カポエイラ』による対話と実践」によせて

都留 Devaux 恵美里 京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程、Nzingaメンバー

2014年9月、ブラジルから三人のカポエイラ師範を招聘して東京と京都で「Ginga Nzinga」というカポエイラのワークショップおよび講演会を行った。招聘したのは、ホザンジェラ・アラウージョ師範(バイア連邦大学教育学部准教授)とパウロ・バハット師範(同大学社会学部准教授)、そして彼女たちとNzingaというカポエイラ・アンゴラの団体を立ち上げ、組織しているパウロ・バハット師範であった。

東京、京都とそれぞれの地でカポエイラ・ワークショップ(動きと音楽の練習)とホーダ(カポエイラの実演)、東京では三砂ちづる氏(津田塾大学国際関係学科教授)を交えて『カポエイラの身体知——ノルデスチ(ブラジル北東部)文化のなかの女性』と題した鼎談、そして京都では福田宏氏(当時京都大学地域研究統合情報センター助教)が司会を務めた『抵抗と解放の身体——ブラジル伝統芸能「カポエイラ」による対話と実践』と冠したパネル・ディスカッションを行った。京都でパネリストとして参加したのは宇野邦一氏(立教大学現代心理学部名誉教授)、ウスビ・サコ氏(京都精華大学人文学部長・教授)、輪島裕介氏(大阪大学文学部文学研究科准教授)であった。

ブラジルという国は、ワールドカップやオリンピックの開催国として、日本でも近年メディアでさまざまな形で取り上げられ、頻繁に耳にするようになってきた。また、カポエイラに関しても、さまざまな流派や団体はあるが、毎年何人もの師範(メストレ)や講師たちが来日し、ワークショップを開いている。ブラジル一般への関心と、カポエイラを学ぶ人たちのこの伝統芸能への関心が総合的に強まるなか、今回初めて、女性のカポエイラ・アンゴラ(より伝統的とされるカポエイラの流派)師範の招聘にいたった。また、私の記憶が正しければ、三人もの師範が同時に来日したのも、初めてのことである。近年、ブラジルでもヨーロッパでも学術的に取り上げられる機会が増えているカポエイラだが、日本での、この伝統芸能に特化した学術的なシンポジ

ウムも、初めての試みであった。

私がこのブラジルの伝統芸能と出会ったのは京都で、10年近く前のことである。当初は、体を楽しく動かす手段をみつけたと思ったのを憶えている。その後、生活環境の変化に伴い何度かあまり練習できなくなった時期もあるが、それでも、住む所が変わる都度、その土地のカポエイラのグループを探して、頻繁には言えないながらも、完全にカポエイラから離れることなく続けてきた。そして今では、スポーツという感覚は後

退し、私の生活のなか、さらには私自身のなかに〈在る〉ものとして捉えるようになっていく。

その大きな転換の決定打となったのが、研究(美術史)でブラジルに滞在していた2013-2014年に会ったNzingaというグループと、その師範たちとの出会いであった。彼らを介して、いかにカポエイ



ラが体を動かすという意味のみでの「スポーツ」ではなく、社会活動であり、今日のブラジル文化形成の一端を担っている、あるいは体現しているのかに気づかされたのである。

Nzingaというグループ自体が、社会的問題意識を比較的強く持ったグループではあるが、今日のカポエイラ団体は、多かれ少なかれ子供の教育や貧困、性差別などの問題に取り組んでいるところが多い。ブラジルの伝統芸能でありながら、現代の社会問題を真っ向から受け止め、独自の解決法を模索するカポエイラの在り方を目の当たりにするにつれ、日本というコンテクストに置き換えた場合の可能性に思いを馳せるようになり、さまざまな示唆に富んでいるのではないかという思いが募っていった。そのようななか、Nzingaメンバーの荒川幸祐氏の呼びかけのもとにこのような機会を得たのである。

今回のテーマのひとつとして、「身体とその解放」というものがあつた。ブラジルを語るうえで、「身体性」はしばしば使われるキーワードである。それはおそらく、この国の文化を研究する者、カポエイラやサンバを踊



り、演奏する者、さらに広義にはブラジルを訪れたことのある者が共通して、なにかしらブラジル特有の身体性なるものを感じ取るからであろう。

カポエイラは周知の通り、ブラジルに連れてこられた黒人たちが、奴隷という劣悪な環境にありながら生み出した、格闘技の要素を含む踊りである(個人的には「舞」と「闘い」であることから「舞闘」という言葉が最もしっくりくる)。今でこそ、カポエイラの「ホーダ」と呼ばれる実演がブラジルの無形文化遺産としてユネスコに登録されているが、長年、反乱や反抗の意志を表す活動として禁止されてきた過去がある。今日、カポエイラがその音楽や動きの独自性と美しさから評価されているのはさることながら、そうした抑圧の過去を乗り越えた、解放の象徴としてとらえられていることも忘れてはならない。

「解放」というときに、大きく分けて二種類あるといえるだろう。一つが、社会的解放で、もう一つが、今回のテーマでもある身体的解放である。

先に述べた「解放」の象徴としてのカポエイラは、もちろん奴隷という立場からの解放で、社会的な解放である。しかしながら、この社会的解放は身体的解放と不可分である。禁止されてきたカポエイラやカンドンブレ(アフリカ起源の宗教)は、身体を伴って表現されるものである。これらの踊りを踊る、歌を歌う、音楽を奏

する身体を、自由に、抑圧されることなく解き放つことが可能になることこそがまさに「解放」なのである。

ブラジルで奴隷制度がなくなったからといって、偏見や格差などの問題が解消されたわけではない。しかしながら、奴隷制度のあった時代から、黒人たちは自分たちのアイデンティティを守りながら、抵抗する手段としてカポエイラという文化を紡いできた。禁止されるまでに、カポエイラを通して当時の制度を脅かし、その制度に対する批判と再考を促してきた。そして今日でも、私たちを取り巻く社会問題に対して、常に再考の必要性を突きつける機能を発揮しているように思われる。

講演会やシンポジウムでは、こうした可能性を持つものとして、カポエイラを身体的、文化的、社会的な側面から、さまざまな分野における研究者の見解を交えて議論することができた。女性の身体と社会との関わり、日本から見たブラジル文化、アフリカから見たブラジル文化など、日本で開催されたからこそその見解も少なからず提示された。そうした意味では、ブラジル文化という他者を見つめることにより、私たち自身の生きる日本社会を見つめなおす作業でもあった。

今回のワークショップと講演会は、これからの更なる対話と議論の皮切りになっただろう。そしてそのことが、今回の最大の功績ではないかと、今後のために、喜ばしく思う次第である。

## GINGA NZINGA 2014

風間 雄太 FICA-Japão 準師範

GINGA NZINGAは、楽しみにしていたカポエイラのイベントだった。しかし、開催前は楽しみな反面、若干不安な部分もあった。それは、4才と2才の息子二人を連れて参加する事を予定していたからだ。初日に先生方に挨拶をする際に、「イベントに子ども達を連れて参加したいと思っています。問題無いでしょうか?」と聞くと、すかさず、「何も心配無いよ!! 連れてきてよ!! お願いね!!」と優しく、笑顔で言ってくれた。その瞬間に不安は完全に無くなり、子ども達と一緒に最大限イベントを楽しもうという考えに変わった。

休憩時間に先生と子ども達が楽しげに、カポエイラをして遊んでいるのを見かけた。そのカポエイラは一般的に言われている“戦い”でもなく、“踊り”でもなかった。その自然な姿はまるで会話で遊んでいるようであった。

カポエイラは、アフリカ大陸から奴隷として連れてこられた多様な人種と文化が混ざりあい、ブラジルで生まれた。その過程では、言語が違う人種同士が同じ時間と場所を共有する必要があっただろう。人種ごとに異なる踊り方や楽器の叩き方もあったと思う、言葉が通じない彼らは、楽器、歌、踊りでコミュニケーションを取り合い、その一つとしてカポエイラが生まれたのかも知れない。

子ども達とブラジルの先生が言語と世代を超えて、カポエイラでコミュニケーションを取り合っていた。カポエイラが持つ多様な可能性と魅力を再確認したひと時だった。

ジャンジャ師範、パウリーニャ師範、ポロツカ師範。三人と共に過ごせた時間に感謝します。

